

仏教文化に与える風土性の考察

和田 謙 寿

一

人間の持つ思想性なるものは、その個人的な特質もさることながら、地形・地質景観や植被・気候性などの持つ自然的風土、ならびに人文上の集落や史的要素に影響せられる場合が多々あり得るのである。世界の各地における人類の異なった生活形態を考察するとき、自然というものが如何に大きな役割をもっているかということを探ることが出来るのである。もちろん、人類の自然を克服している点は数多く存していることであろうが、その根本的な問題は現在そのすべてが解決されているわけではなく、依然として自然は人類の主要な条件としての役割を維持し続けているのである。人間がこの世に存するためには、種々なる文化的所産を必要とするであろうが、その中でもとくに着眼せられるものに宗教の問題がある。宗教の歴史は人間の歴史と共に存在し、その地域性に即した生活と共に歩んできたように感じられる。世界の

三大宗として著名な仏教やキリスト教、回教などの成立発展もその過程をつぶさに観察するとき、風土性との関連が如何に強いかということをも必然的に見られるのである。かかる観点に立つて風土の種々なる現象を直観的に眺め、他の宗教と対比しつつ、仏教的な人間への諸条件を歴史地理学的な立場でここに考察してみようとするものである。但しここでは、紙面の都合上概念的なものとなるおそれはあるが、一方法論的な試論として掲げたいということである。尚この問題については、和辻哲郎氏が岩波書店の紙上において、風土(人間的考察)のもとに発表せられているところであるが、私もここに海外を旅行して種々気のついた事々を参考に、付記考察してみたいと思う。

二

稲作の地域帯と仏教とが昔から深い関係のあつた事は確かなことであつた。日本における稲作農業は原則として一年の

うち、とくに夏といわれる一時期に限られている。東南アジアの国々の場合、稲作は夏に限つた事ではなく、一年中収穫は出来得るのである。日本の場合には冬季は寒さのために稲作は出来ぬが、熱帯でも雨季と乾季とのハッキリとしているところでは、やはり稲作は無理かも知れない。しかし日本の場合と異なるところは灌漑さえすれば稲作は可能となることである。最近では相当北部に面した寒い土地柄でも日本の場合の如く、農耕技術が進み、ビニール温床栽培などの行われる地方では稲作の範囲が拡大されるようになってきたのである。日本の江戸期から明治・大正にかけての稲作の品種改良の結果は、史的にみて一層耕作面積を拡大したが、それに伴つて仏教人口の分布も急激に増加している。日本を含めた東南アジアの国々の大部分の地域は稲作の地帯であり、同時にその地域の殆んどの国々が仏教中心の国家であることは何か非常に興味が湧く。たとえ中国に儒教や道教が発展し、日本には神道が栄えていたとしても、結果的には合理的に仏教と結合して発展し合つたことは周知の事実である。また、現在回教圏といわれているマレーシアやインドネシアの国々も、かつては仏教国、または、それと関連のあるヒンズウ教の一員であつたのである。現在政変によつて社会主義化しつつある諸国、または、社会主義化した国家においては仏教も停滞状態にあるといわれている。今後の宗教事情については

仏教の見通しも極めて困難であるが、東南アジアの経済的実権を把握しているといわれている華僑の間においては、まだまだ仏教は根強く支持せられて行くものと確信される。もちろん、彼等の間に栄えているところの宗教は大乗的な民衆仏教である。東南アジアの政変部を除いた広大な泰国やマレーシア・フィリピンなどの本土をはじめとして、その田舎部や島嶼部の地域においても回教などをはじめとした他宗教の中に仏教も根強く滲透しており、日本の近世以降における近江商人の活躍の如く宗教をバックとしたところの、教線拡張ぶりがよく伺われるのである。華僑仏教の布教伝播の前には実に国境はあり得ぬ現状である。これも華僑の出身地の大部分を占める華南（広東・福建・厦門）という風土性より生じたところの所以であらう。稲作地といえは我々には東南アジアが。東南アジアといえはモンスーン気候が思い浮ぶ。実に稲作がなし得る最大の条件はモンスーンの賜によるものである。中国も日本も、東南アジアの半島部も、更に、東アジア沿岸一帯も風土的にモンスーン地域に属している。夏のモンスーンはとくに湿気を含んだ空気を強い風力によつて陸地に吹きつけ、地球上においても特殊な風土環境をつくりあげている。この地域ではいずれかというに暑さよりも遙かに湿気の方が耐え難く住みにくい一面はあるが、このような状況がかえつて高温と湿度とを条件とするところの種々の草木が繁茂育成

する結果となつたのである。我々の食料としてとくに大切な稲作や、または、仏教の伝説と意外に関係深いと思われる蓮華^{スズナ}の耕作地も、この地域に好んで栽培せられていたのであり、仏教の伝播発展との深い連りのあることもうなずかれる。とくに、日本の場合には梅雨とか台風と呼ばれる気象的な特殊な現象もあり、冬には大陸より吹きよせる季節風の影響により大雪の現象がしばしば見受けられるところである。北陸や山陰地方という日本海側の特異な気候は、祖先の永年にわたる稲作の品種改良という並々ならぬ努力によつて特殊な早場米の進出に成功している。つまり、当地は米作のメッカ地帯となり、多忙な稲作生活を通して生じたところの祖先融合思想と、仏教を通して祖先崇拜的な思想とは巧に接触し結合同化して年忌習俗の発展など、他地方では見られぬところの我国独自の厚い民衆仏教習俗が伸展したのである。とくに、この米場地域の一帯には禪宗（とくに曹洞宗）や浄土真宗の宗派が栄え、農耕まつり、（農耕予祝と豊作の両者を含む）と仏教行事との結合は年中行事の主要なるものとして取り入れられ、曆上にかざられたのである。日本には他の国々にあまり見かけることの出来ない判然とした四季の変化がある。つまり、はつきりと区分せられた春夏秋冬の別がそれである。衣食住という人間生活の主要事項において、我国では強くこの季節節に対処すべき生活様式が要求せられた。もちろん、宗教

的な立場においてもそれは例外ではなかつた。江戸時代を含む昔日において、国民の大部分を占められると思われる農民の多くは、只黙々として働く事を強いられるのみであつた。とくに稲作農業の場合、欧米などの如く麦作の地域に比べたならば、その忙しさは到底対比さるべきものではなかつた。それだけに稲作を通して生じたところの家族構成の協力と団結さは非常に強力なるものがあつた。日本における民衆仏教の根強さは斯かるところに基盤が存したからであらう。四季の氣象狀況に少しでも異常が現われた場合には、これが鋭敏に農耕生産や農民生活に大きな影響を与えたのであり、それだけにまた、自然に対する祖先たちの心くばりは大なるものがあつた。昔日、田の神や山の神などといわれて農耕生活を守つてくれた神々たちも、実はその本地を探れば、我々の祖先神の現われであつたのである。それだけに農耕社会においては祖先との関連性が至つて強く、しぜん、仏教の進出もかような状態をみのがすわけはなく、農民の行方行事の中に巧みに滲透しつつ同化していつたのである。日本仏教習俗の中で欠かすことの出来ない重要な行事、つまり、春秋の彼岸や盂蘭盆、施餓鬼会、盆踊りなどの諸行事も、この線に沿つて行われたものである。稲作という多忙な民衆生活の中には、なかなか自己本位に休日をとれるものではなかつたであらう。彼等農民たちの休日は前述した如き仏事を中心とした当日日

か、地神講とか、お日待、月待などの如き在来日であつたのである。時には近隣の友と共に旅路をなしたこともあつたであろうが、その多くの場合には講などを中心としたところの神仏への参詣であり、現在の旅行とは遙かに離れた存在であつたのである。日本の年中行事を通じての仏教習俗というのは、他国の宗教的習俗慣行度に対比してパラエティに富み、その度合もいずれかというに誠に高いものであつた。その理由はいうまでもなく、第一に、四季の変化の判然性からくるところの生活の様式が民衆の間によく滲透していたことと、第二に、我国がアジアの最東端に位置する文化の保存に適した島嶼であるということであつた。ひとたび日本に伝來した文化は太平洋によつて分断され、我国に停滞する形をとつたのであつた。第三に、我国における風土景觀と稲作を通じての社会的現象、更に家庭の有機的事情と民衆的仏教との間に、何か本質的に相通するものが存していたことによるものであらう。

三

地球上における北部と南部との位置の相違は、太陽のもつ力の強弱・晴天や曇天などの気象上の変化など、種々多彩な形としてあらわれている。同じ仏教の信仰地域といえども揚子江の平野は稲作の地域であるが、黄河一帯の平野は麦作の

地域である。形態的には黄河周辺の黄土^レ地帯は沙漠とモンスーンの共存的地域である。しかし、この周辺は風土的にも歴史的にも仏教的色彩の強い地域であることは免れない。中央アジアの如く更に一層の沙漠色が濃くなると稲作地域と異なつた特殊な宗教的な感情を持つことになる。人間と自然との統一のなかわり合いが対抗的な戦闘的な積極的な關係として存在する。ステップやオアシス、井戸などの如き生活必需品を自然より奪い取るによつて人類は家畜を飼い、更に繁殖させることが出来た。また、自然を勝ちとるために人間は団結をした。人間は共同体において始めて沙漠に生育することが出来たのであつて、個人的な立場では一日あたりとも沙漠に生存することは不可能である。つまり、ステップやオアシスを自然から護りとることが出来たのは一個の人間ではなくして、共同体を営むところの人間であるといえる。和辻氏はそれを表現して、「夜の沙漠に於て見渡す限りの大地が黒く物凄³き死の姿である時、遙かなる地平線に現はれた一二の「燈火」は異常な強さを以つて人間の世界を、生を、暖かいなつかしさを印象する。……この特性はそのままアラビア美術として結晶した。あの華麗なアラビア風の裝飾様がいかにか著しく、人工的であるか、或いはまた、あの簡素と力強さを輪廓に現はしたモスクがいかに著しく夢幻的であり離自然的であるか、それを正しく理解せしむるものは、沙漠的

人間の自然への対抗である。……かかる戦闘的生活様式は遠い古代から回教の時代に至るまで常に沙漠の人間の特性であった。アラビアの半島に住む種々の民族は創世記の命名に従つてセム族と呼ばれているが、その包括するアラビア人、ヘブライ人、フェニキア人、アルメニア人などは、その性格や精神的特性に於て共通であり、言語も甚だ好く類似している。

さうして、「このセム族のあらゆる精神的特質、その考へ方、その宗教、その国家的制度などは、すべて沙漠の民族の生活条件から説明せられている。それが戦闘的生活様式である。……人は昔と同じく部族の団結を離れては自然の脅威に対抗し得なかつた。部族の全体性への「服従」は依然として沙漠の生の可能根拠である。マホメットはこの全体性の表現たる「人格神」を新しく活気づけた。部族への服従を神へのイスラム（服従）として力説した。彼はその部族の内部において、會つてのモーゼのように、この「神へのイスラム」を実現し、その力によつて他の部族に対する戦闘を始めたのである。「アブラハムの神」は回教に於て服従的戦闘的な沙漠的性格を露出したと言つてよい。」

と述べられている。

アラビアを中心とした中央アジアの国々の雨量は日本の数十分の一という微々たるものであり、この現実に耐えぬくための回教徒の厳しさがうかがわれる。しかも、同じ回教圏で

も、マレイシアやインドネシア地方の回教徒の場合は多少異なり柔軟性をもっている。この地方の回教が国教的なものとして保護指定されているものの、いまこはかつての異教徒（異教慣行）の上に伝播定着したものであり、更に、マレイシアの如き国家においては、人種別により、固く特定の宗教を信仰しているという国是の故に、斯くならざるを得なかつたのであらう。つまりそれぞれの人種により、マレイシア人は回教を、中国人は仏教を、インド人はヒンヅウ教を篤く信仰しているという状態である。更に湿潤高温という風土性は、これに拍車をかける結果となつたのである。回教圏によつて囲^⑤まれているヒンヅウ教を主体としたバリ島なども、少数ではあるがその中に仏教的な色彩を残しており、宗教上（主にヒンヅウ教）の慣習はそのまま村の計画や家庭の中の秩序、人々の道徳律を意味している。祝祭日、娯楽、社会的な集まりなどは宗教上の暦に基づいて決められているが、斯く、現代までも回教圏の中のヒンヅウ地域として残されている所以のものは、歴史的事実と共に島嶼という風土性の賜であつたのである。同様な事は、アジアの東部に突き出た朝鮮半島の場合においても考えられる。韓国の場合、当地における宗教の割合は仏教信仰に偏つているといわれている。但し平地部における存在^⑥の率は極めて低い。つまり仏教徒（殆んど韓国の場合は儒仏合体である）八五〇万人、キリスト教徒四五〇万人と

いわれている。寺院の殆んどが山中に存在している。これは、かつて廃仏毀釈の影響のもとに迫害を受け、僧侶たちが山間部に逃れて生活した故といわれている。仏者存在としての文化的、時間的の構造は風土性、歴史性としての自己をあらわしている。ここにいわれる歴史性とは、社会的存在の構造をなし得るのである。同時に風土性もまた、社会的存在の構造となり得るのである。韓国では原則として墳墓には日本の古墳の如くその表面に植物（雑木）を生やさない。植物が墳上に生え繁つているのは子孫が墓を守りしていないということであり、つまり、祀り手のない証拠であり、祖先に対して大変失礼になることだといわれている。そのため多くの墳墓は芝で覆われている例が多く、更に墓は円墳状をなし、先祖よりも大きな良いものを作ることは先祖に対して無礼なことであるとして、原則的に先祖より広い墓地をつくることを遠慮し、しかも塔を建てぬのが通例であるといわれている。これは儒教的精神によるところ大であるが、更に他にも理由があるかのように考えられる。韓国の風土はその多くが山地部よりなる。その山地の地質も花崗岩質の岩石より構成され、従来、儒教的な精神によつて構成維持せられてきた土葬の風習も国際的な食料需要の悪化現象によつて、現在、政府は火葬へと転換することをすすめている。それは今後、従来よりの土葬現象の抑制により、耕作地への侵害を喰いとめること

仏教文化に与える風土性の考察（和田）

を国是としているからである。同様な事は日本においても考えられた。従来火葬は教理的に禪宗や浄土真宗の間に広く伝播しているものと考えられていた。確かに火葬の分布地域は禪宗や浄土真宗の間に高かつたのである。しかし、その後の研究の結果、教理的なものよりもむしろ、風土性の影響による場合が強い条件となることが知られたのである。つまり、火葬を是認するところの思想的立場をもつところの地域民であることを第一として、1、地下水が浅い地域で土葬の困難なところであるとか、2、岩石の露盤がはみ出ているところ、埋葬がしにくい場所であるとか、3、稲作地域で火葬に必要な藁などが沢山産出されるところであるとか、仏教文化に与える風土性というものが実に、偉大なる影響力を有していたのであつた。

参考・引用文献

- 1、郷土研究講座「風土」角川書店発行八九頁。
- 2、古事類苑「ハチスの項」一四一頁。
- 3、和辻哲郎著「風土（人間学的考察）」昭和十九年岩波発行二〇七頁。
- 4、和辻哲郎著 前同 七六頁・九一頁。
- 5、「ベ」1970 Hong Kong 翻訳・組版六一頁。
- 6、張籌根著、「韓国の民間信仰」昭和四十九年金花舎発行二二二頁。